

教養としての英語教育とは——Grammar-translation method文法訳読方式の意義を再考する

江 藤 裕 之

【要 旨】 英語教育への批判が喧しいなか、英語の授業が口頭での受け応えを中心にした内容へと移って久しい。もちろん、すぐに使える英語を学ぶという社会のニーズがある以上、このようなオーラル・メソッドへの移行はやむをえないが、その反面、文法訳読方式で培われてきた「知力を鍛える」側面がないがしろにされているようだ。そこで、大学の一般教養科目としての英語教育では、幼稚な内容の会話能力をつけることよりも、知力の陶冶を第一に目指すべきではないだろうか。それは、1) 言葉を大切にする（相手を理解し、自分を理解させる）精神、2) 知力を鍛える（既成の価値を疑い、批判的に見ることから判断力をつける）精神、3) さまざまな専門的学問の基礎となるようなものの見方や考え方を学ぶ精神、4) 個別的な問題と普遍的な問題を行き来する姿勢を持つ精神、を重視し、自分で「学ぶ」基礎を作ることである。本稿では、文法訳読方式の意義を再考し、そのモデルを提示してみたい。

【キーワード】 英語教育、文法訳読方式、教養教育、教養課程、一般教育

はじめに

「生きた英語」、「実用英語」、「役に立つ英語」——このような言辞の裏には、今日の英語教育に対する痛烈な批判がある。それは、主として、学校で英語の時間に習ったことが外国人の前では使いものにならなかったという恨みから生ずる批判である（渡部、1975）。もちろん、日本の公教育（私学も含め）の場で教えられている英語は現代における標準英語であり「死んだ英語」ではない。よって、役に立たないという印象があるとすれば、教えられる英語そのものに問題があるのではなく、その教え方——伝統的に教室で行なわれてきたルサンティマン文法訳読方式——の故であろうと考えられる（担当教員の英語の実力についてはここでは問わないことにする）。

英語が事実上の国際公用語となり、外国への渡航や、外国人との接触が珍しくなくなった今日、社会が英語教育に要求するものの第一はすぐに使える英語力、つ

オーラル・コミュニケーションまり英語による口頭での意思疎通であることは当然であろう。学習機材の技術的進歩やネイティブ・スピーカーとの協働により、その方法にはさまざまな工夫と改良がなされている。その一方で、いわゆる「受験英語」と称される英文和訳と内容読解を中心とした入試の英語問題への対策というニーズもあり、これが文法訳読方式を護持する結果となっている。

英語学習の内容的ニーズは個別的なものであり、その意味で「使える英語」の内容は多岐にわたっている。そして、時間的・物理的な制約を受ける教育の現場では、個々人の異なるニーズをすべて同時に満たすことは不可能であり、聞く、話す、読む、書くという言葉におけるすべての側面を万遍なく実用の域まで習得することが理想だと分かっているにもかかわらず、授業においては何らかの制限が必要となる。そこで、英語の授業で何を優先するか決定や具体的な授業展開に際しては、授業目標や受講生のニーズを考慮しながらも、担当教員の信念と責任に基づく方針でよいのではないかと考え

る。

本稿では、大学の教養課程で英語を教える一教員としての立場から、一般教養科目として位置づけられている大学の英語教育のあり方、つまり「教養としての英語教育」の意味を考え、文法訳読方式の効用を見直す意味でひとつの実践例を提示してみようと思う。英語教育全般に対する批判を受け、さまざまな英語教育改革が試みられるなか、大学の教養科目としての英語教育はどうあるべきか——何を目標とし、どのような方法で行なわれるべきなのか——についての私案を提示し、批判を受けることはその立場にあるものの責務であると考えているからである。

大学における教養教育とは何か

高等学校までの授業では、各教科において現代を生きるために必要な知識や技術が教えられ、それはもともと広く認められている学説に基づくものでよい。しかし、大学では、主流となる学説のみならず、たとえ少数意見であっても対立する説を紹介したり、また、教員自身の仮説を披露することも必要である。大学教育においては、すでに定説となっている知識の伝授のみではなく、ものを見る視点、考えていく筋道、既製の説を疑い乗り越え新たな知見へと向かう批判的な精神の大切さを示すことの方が重要であるからだ。大学教育の特徴は、教員の研究活動を通じて行なうところにある。

しかし、高度技術社会の今日、それぞれの分野で活躍する専門職者を養成することが期待されている大学では、その分野に必要な知識と技術を学生に教え込むことも重要な責務であることは言うまでもない。建前として、大学は職業訓練校ではないと主張したところで、現実問題としてそうも言っておれない。例えば、看護大学を例にとれば、「看護とは何か」を学生とともに考えることも重要だが、看護の現場で必要となるさまざまな技術を教え込まねばならないし、また、看護師国家試験に合格するための知識を習得させることは必須条件である。このような観点から、大学レベルの英語授業においても、英語について知ることや、英語を通して何かを知ることよりも、まずは英語そのもの

のを使えるようにすることが重要という考えは理解できる。

実社会ですぐに役立つと考えられる「聞く・話す」ための英語力（レベルの高低は度外視する）を重視する「実用派」にすれば、読んで訳すといった英語の授業方式は役に立たない英語教育の元凶と見なされよう。一方、「訳読派」には自らの方法を「教養の英語」として位置づけるものも多い。英語（外国語）教育での「実用 vs. 教養」の対立は今に始まったことではないが（川澄，1978）、教養派の主張する「教養」なるものの定義は明快ではない。むしろ、「教養」という言葉が、英語のリスニングやスピーキングの訓練を怠るための格好の隠れ蓑になっているような印象すらある。そこで、まず「教養」についての考えをまとめ、そこから「大学における教養科目」として位置づけられる英語教育の本質を考えてみたい。

1. 教養とは何か

「教養」とはよく使われる言葉ではあるが、いざ説明せよとなると難しい語である。普通「あの人には教養がある」と言った場合、多くの書物を読み、その内容に通じている人のことを指すようである。ここで単なる物知りと区別されるのは、その書物がいわゆる哲学や文学を中心とした古典的名著と呼ばれるものであるという点だ。しかし、書物を読み、その内容を理解し、多くの知識を有していることは教養人たるものの一必要条件であるかもしれないが、十分条件ではない。つまり、そこでは何のために書物を読むのかということが重要である。

国語辞典には、「教養」は「教えそだてること (culture ド Bildung)。知識、学殖の深化や情意の修練によって、人格の成長・発展を図ること。また、それによってやしなわれる心の豊かさ」（『新潮国語辞典』，1995）といった定義がなされている。つまり、教養の目的は人格の成長と発展であり、読書はその一手段に過ぎないということだ。このような教養の概念は識者の中にも認められる。例えば、教養があるということは「自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のためになにができるかを知っている状態、あるいはそれを知ろうと努力している状況」（阿部，1997）であるとの

主張や、また、

私にとって教養という言葉の持っているぎりぎりのものというのは人間としてのモラルです。[...] そういうごくごく当たり前で、別段特別の教養がある人でもない、特別の教育を受けたわけでもない人たちでも、自分の中にきちんとした規矩を持っていて、そこからはみ出したことはしないぞという生き方のできる人こそが、最も原理的な意味で教養のある人と言えるのではないか [...] (村上, 2004)

という見方もある。

こういった解釈に共通するものは、教養は「人として誰もが立派だと認める行動の原理・規範となるもの」ということである。論語に「行いて余力あれば、則ち以て文を学ぶ」(学而第一)とあるように、教養のあるなしは知識や言説による以前に、その人の行為によって——より正確に言えば、行為の源である精神によって——判断されるのである。したがって、教養を考える上では、精神(人格と言ってもよい)をどのように鍛えるかが、最も重要な点となる。

2. 教養教育のめざすもの

このように見てくると、「教養」なる語にはドイツ語のBildungが意味する「人格形成・陶冶」や、英語のcultureが意味する「鍛錬」という概念が当てはまるようだ。言うまでもないが、その鍛錬は外面的なことではなく、内面、つまり精神的なものの鍛錬である。ソクラテスの言う「魂の世話」のことである。そして、繰り返すが、古典的名著の読書と咀嚼はその有効な手段となりうるが、それ自身が決して目的ではない。

人間はある特定の社会、地域、時代に身を包まれて生きており、そこで培われた文化より思考や行動がかなり制限されている。文化とは、共時的に言えば、ある空間を共有して生きている人間の精神により創り出されるものであり、通時的に言えば、そこに生きてきた人間の精神の総体である。よって、人間精神の具体的現れとなる教養はこの個別的な文化的伝統に基づくものである。英語では「教養」も「文化」もcultureという一語で表されることがうなずける。

したがって、われわれの個別的な文化的伝統に基づく教養、すなわち「日本人の教養」を考えることは、日本人としての行動原理を支える伝統や文化の考察に連なる。そして、日本古来の伝統や、独自の文化を継承し、伝承していくために、つまり日本人としての教養を身に付けるために、もっとも重要な要素は言葉を大切にすることであろう。すなわち母国語を大切にすることであろう。言語が精神形成に影響を与え、それを話す人々の世界観や思考の鑑であるとは、言語学者がつとに主張することである。しかし、そのような指摘を待たずとも、「言葉の乱れは心の乱れ」と言われ、心(精神)の乱れは、即行為の乱れへとつながり、ひいては無教養の謗りを受けるものとなる。

さらに言葉は、それを話す民族が長い伝統と文化の中で築きあげてきた共通感覚や倫理観を示す手段でもある。この共通感覚のあるなしが、教養のあるなしにつながっていく。その感覚には、言語で認識される以前のもの、すなわち感性的なものがあることも否定できない。しかし、そのような感性までも言語化し、感動を共有しようとしてきたのがロゴスの動物としての人類に普遍的な特性であろう。

言語は単なるコミュニケーションの道具と解釈されるべきものではない。人間と他の動物とを区別する種差である言葉は、第一にロゴス(理性、思考、認識)を働かせる手段である。したがって、内面(人格)を陶冶することが教養教育の目的であるとすれば、相手の言うことを正確に理解すること、理解したことをよく考えてみること、自分の考えることを正確に相手に伝えること、といった言葉の教育こそ教養の基礎となる。その意味で、語学の習得をもって諸学の基礎とした伝統的な自由学芸リベラル・アーツと通じるものがある。

このように、教養教育のめざすものとしては、最終的なゴールとして人格形成であるとしても、学校の教養教育段階における英語授業においては人格の陶冶を全面に押し出すことには無理がある(そうすると、道徳や修身の時間になってしまう)。そこで、教養としての英語(言語)教育の現場では個人が人格形成をする過程で、その個人を知的な観点から助けるために次のような点を重視することが必要と考える。

- 1) 言葉を大切に（相手を理解し、自分を理解させる）精神
- 2) 知力を鍛える（既成の価値を疑い、批判的に見ることから判断力をつける）精神
- 3) さまざまな専門的学問の基礎となるようなものの見方や考え方を学ぶ精神
- 4) 個別的な問題と普遍的な問題を行き来する姿勢を持つ精神

では、具体的に、英語の授業を通して、どのような形で上のような教養教育の理念が実践できるかどうかのシュミレーションを行なってみよう。

知力を鍛える文法訳読法のモデル

次の英文が主張する内容について、日本語による50字程度の要約を学生に与えてみる。

Nursing makes use of knowledge from science and technology for healing the individual patient. Nursing is concerned with the relationship between universals, known through the sciences, and unique individuals, known by direct acquaintance. The problem for nursing is how to increase and apply its repertory of universals, while at the same time respecting the unique individuality of the patient and the unique individuality of each nursing occasion. Nursing gathers its generalizable knowledge from experience with unique individuals, from the sciences, and from other sources such as everyday nonscientific knowledge, yet nursing always returns to the individual for the application of its knowledge. Hence, nursing continually travels in a circle between universals and irreducibly unique individuals.

この文は *Philosophy of Nursing* (Brenck & Webster) の冒頭の1パラグラフを抜粋したものであ

る。英文の構造はシンプルだが、内容は抽象的で、理解は容易ではない。単に英語から日本語に語の意味を置き換えただけではつかみにくい英文である。普段から個々の語の本質的な意味、文中での他の語との関係や繋がりを考え抜く癖をつけなければ、「訳せるが、内容が分からない」となってしまう。

1. 重要語句の説明

ここでは、science/technology, universal/particular (individual)などの「基本アイディアの対立関係」には常に注意を向けることを喚起したい。そこで、まず、重要語句について次のような説明を行なう。

- **nursing** 辞書では「(職業・業務・実践としての) 保育・看護」との訳語が一般的であるが、最近では「(学問としての) 看護」すなわち「看護学」という意味で使用されることもある。通常、「学問」に関連する語は -logy で終わるもの (psychology, sociology, biology) や、-s で終わるもの (mathematics, linguistics, physics) が多いが、「看護学」の場合語尾が -ing となっているのはその「実践性」のゆえであろう。

- **knowledge** 「知識」と訳してよいが、辞書の定義では information and understanding about a subject which a person has, or which all people have (COBUILD) だとか、information and skills acquired through experience and education; the sum of what is known (COD) となっている。ここでは、「知られたものの総体」としての knowledge と、その各 knowledge がひとつのシステムの基に統合された science とを区別したい。

- **science / technology** 一般に「科学・技術」と訳すが、これはギリシア時代の知識の4段階の上位2つ episteme (epistemologyの語源) と techne (technique, technologyの語源) に対比してよい。この両者はラテン語では scientia / ars となり、語源的に英語の science / art に連なる。その意味で、science / technology は science / art の対立と重ね合わせることができる。つまり、人間の製作活動一般に伴う(動的な)「知識・技術・技」としての art と、ものの本質を理解することを目標とした science との対比が「看護」という場面で重要視さ

れているのである。

- **individual** 「これ以上分けられない」という意味で、「個人(の), 個々の」という訳語を与えている。collectiveの反意語としても覚えておきたい。

2. 丁寧な逐語訳

以上のような語句の解説を踏まえた上で、パラグラフの個々のセンテンスを丁寧に読み砕いていく。

1) Nursing makes use of knowledge from science and technology for healing the individual patient.

この文ではscienceとtechnologyの対比関係が要となっている。つまり、患者の病気を癒す「看護」においては、普遍性・一般性を持つ科学・学問を基礎に置いた知識（体系を持った「知」の集合）と、個別の場面に応用する実践的技術とを「and (=同時に)」使用すると述べている。それは、看護においては学問と実践（これは「理論と実践」「科学と技術」と言い換えてもよい）が同時に利用されているということである。

直訳：看護は、個人の患者を癒すために、科学と技術からの知識を使用する。

この直訳でもさし当たって問題はないが、fromが「出发点」を示すことを考慮し「science and technologyを出发点とした体系的・普遍的な『知』の集合」という語感を出すため「科学・技術に基礎を置いた」と訳してみよう。

試訳：看護は、科学・技術に基礎を置いた知識を使用し、患者一人一人を癒すことを目指している。

繰り返すが、この文の背後には「普遍と個別」というアイデアが隠されていることを見落とさないようにしたい。最後のthe individual patientの部分は定冠詞theによる集合的表現である。

2) Nursing is concerned with the relationship between universals, known through the sciences, and unique individuals, known by direct acquaintance.

この第2文で「普遍と個別」の対比 (universalsとunique individualsとなっている)がさらに明快になってくる。前文ではscienceと無冠詞・単数となっている

たのに対し、ここではthe sciences (定冠詞付・複数)となっているのは、前者が抽象的・包括的な意味での「科学・学問」を指しているのに対し、後者は具体的な「学問の諸分野、科学の諸形態」を意味することによる。また、universalsも「さまざまに異なる科学の分野を通して」それぞれの分野における「普遍的なるもの」という意味で複数形になっている。

直訳：看護は普遍的なるもの、それは科学を通して知られるが、そして、独特の個人、それは直接知り合うことによって知られる、その両者の関係に関心を持つ。

この直訳でも問題はないが、「普遍と個別」の対比をさらに訳出したい。

試訳：看護で関心が持たれているものは、普遍的なるものと、その対極にある独自の存在である個別的なものとの関係である。前者は、さまざまな学問・科学を通じて知られ、後者は直接面識を持つことで知られる。

3) The problem for nursing is how to increase and apply its repertory of universals, while at the same time respecting the unique individuality of the patient and the unique individuality of each nursing occasion.

ここでのwhile, at the same timeは「同時性 (同時に)」→「対照・対比(一方では・しかし)」を表す。よってここでもuniversalとindividualの対比が明らかである。1行目ではthe problemと初出にもかかわらずproblemに定冠詞theがついているので、これは「筆者が考える、看護における唯一絶対無比の重要(ある意味で、理想的・典型的)な問題」を述べていることになる。

直訳：看護の問題は、患者の独特な個性や、個々の看護の場の独自性といったものを尊重する一方で、その普遍的なものをどのように増やし、そして応用するかということである。

この直訳でも問題はないが、Whileの部分を頭から訳出してみる。

試訳：看護で問題になることは、それが持つ普遍的側面をいかに増やし、また実際に応用していくかということであるが、それと同時に患者一人一人の個性と、

それぞれの看護の場に応じた独自性とに目を向けることでもある。

4) Nursing gathers its generalizable knowledge from experience with unique individuals, from the sciences, and from other sources such as everyday nonscientific knowledge, yet nursing always returns to the individual for the application of its knowledge.

ここでは、さらに看護における「個」と「全体」の有機的關係が述べられている。一般化された「知」とそれを「技術」として応用する場が連関していることが読み取れる。

直訳：看護は独特な個人との経験、諸学問、そして毎日の非科学的な知識のような他の源から一般化される知識を集める。しかし、看護は、いつもその知識の応用のために個人に戻るのである。

内容は分かるのだが、それがうまく伝わる日本語になるためには工夫が必要である。

試訳：看護は、個々の患者と接する経験、諸学問の成果、その他日常の非科学的な知識の源から一般化される知識を集める。しかし、それでも看護は常に、その知識の応用の場としての個人に注意を向けなおしているのである。

5) Hence, nursing continually travels in a circle between universals and irreducibly unique individuals.

そして、この段落全体のまとめとなるが、ここでも universals と unique individuals との対比が出ている。特に universals と individuals がそれぞれ複数形になっていることに注意する。唯一絶対の「普遍」ではなく、それぞれの分野・場面の個別的な「普遍」を問題にしている。

直訳：よって、看護は、継続的に、普遍と、減ずることのできない個人との間を円状になって動いているのである。

試訳：よって、看護は、普遍的側面と、それ以上分けることのできない独自の個々のものとの間を円環的に動き続けているのである。

以上をまとめると、全訳は次のようになる。

看護は、科学・技術に基礎を置いた知識を使用し、患者一人一人を癒すことを目指している。看護で関心が持たれているものは、普遍的なるものと、その対極にある独自の存在である個別的なものとの関係である。前者は、さまざまな学問・科学を通じて知られ、後者は直接面識を持つことで知られるものである。看護で問題になることは、それが持つ普遍的側面をいかに増やし、また実際に応用していくかということであるが、それと同時に患者一人一人の個性と、それぞれの看護の場に応じた独自性とに目を向けることでもある。看護は、個々の患者と接する経験、諸学問の成果、その他日常の非科学的な知識の源から一般化される知識を集める。しかし、それでも看護は常に、その知識の応用の場としての個人に注意を向けなおしているのである。よって、看護は、普遍的側面と、それ以上分けることのできない独自の個々のものとの間を円環的に動き続けているのである。

3. 要旨のまとめ

ここからこのパラグラフの論旨を50字程度でまとめさせる。要約は、それが何字でまとめるものであろうとも、「核」となるアイディアが含まれているかが必要不可欠である。そこで、まず本文の中心テーマを「ひとこと」で言うとうどうなるかを考える。それは「何が—どうした」というように、まずは「主—述」の関係でまとめてみる。全文を読み、その言わんとしていることを自分の言葉でまとめ直すことが肝要である。

この文では、「看護には、普遍的な側面と、個別的な側面とがある」というのが中心テーマである。これを核にして、あとは修飾する語句を「過不足なく」つけて、所定の字数にまで引き伸ばしていけばよい。

(第1段階) 看護には、普遍的側面と個別的側面とがある。(21文字)

↓ ↓ ↓

(第2段階) 看護では患者を癒すため、普遍的な科学的知識を個々の患者への個別的ケースに応用している。

(43文字)

↓ ↓ ↓

(第3段階) 一般的な学問的知識を個々の患者に対する実践に応用する看護では、普遍と個別が対立しつつ調和している。(49文字)

このように、全文を丁寧に読み解き、そこからエッセンスとなる内容をまとめさせることで語学的側面の学習は終了する。

4. 文章の背景となる解説

最後に、この問題の背景となるものを考えていく。

ここでは「看護」という具体的事例の中で、「個」と「全体」というアイディア的対立が取り上げられている。普遍的学問としての「看護学」と実践的技術としての「看護実践」はそれぞれ相互依存しながらもその独自の領域の重要性を主張しているということだ。これは、もちろん「看護」に限ったわけでもなく、「純粋(理論的)言語、社会、心理学」に対して、「実践に応用するための技術」というものがある。

scienceとは自然科学的な、つまり追証可能な(誰がやっても同じ結果が出る)厳密科学・法則科学のことであり、一般論・普遍論を目指す学問をいう。それに対し、technologyは基礎学問研究の実際応用である(もっとも、単なる「経験」とは異なる)。technologyの語源はギリシア語の^{テクネー}techneであるが、これはラテン語では^{アルス}ars(英語のart)となる。つまり、ここでのscience and technologyの対応は、即science and artの対応ともなるのだ。純粋学問としての科学的側面は「普遍的(universal)価値」を求め、応用としての技術的側面(普遍的な側面を持ちうるが)はその「個別的(individual)可能性」が試されるものであるここで確認される。

universalとindividualとの関係は、別の言葉を使えばuniversal and particularの対比関係ともなる。つまり、看護がひとつの科学(学問)として成立する以上、そこに普遍性・一般性がなくてはならず、それは多くの諸学問(医学、薬学、心理学、生理学、etc.)の助けを借りることで追求することができる。その反面、臨床、あるいは対症療法という点での看護の対象

は個別の患者にあたるわけで、その意味で個別的なるものが常に付きまとっている。つまり、看護には極大としての「普遍性・一般性を持った科学(学問)的側面」と、極小としての「個々の患者のケアに活かす技術的側面」が存在する。

ここで注意すべきことは、universal/particular(individual), science/technology, general/specialなどが概念的二項対立の図式となっているが、まずは科学(学問)とは何かという点についての理解があって、ここで看護が「理論としての科学(学問)」と、「実践としての技術」との間を常に行き来する存在であるという主張が理解できる。

おわりに

以上に示したような内容はこれまでの日本の英語講義の授業では(高等学校のレベルにおいても)、オーラル・コミュニケーションの授業に取って代わられるまで、標準的に行なわれていたものであろうと考えられる。もちろん、内容解説の量と質は担当者の興味関心と力量に左右されるものの、テキストを丁寧に読んで理解するという態度は大切にされた。このような文法翻訳方式による英語の授業は、リスニングやスピーキングといった多分に感覚器官の鍛錬によるものとは異なり、じっくりと考え、頭を働かせるという点においては有効なものである。

読解では、理解のスピードが要求されることが無いので、内容的にもしっかりした、読み応えのあるテキストが題材として選ばれる。次に、文法的に忠実に読み下していくことで、英語の構造を理解し、さらには日本語との構造的相違を意識することになる。また、個々の語を辞書から移し変えるだけではなく、それぞれの語の^{デノテーション}明示的意味と^{コノテーション}暗示的意味を考えさせることができる。これは、言葉を大切にするという精神を鍛えるものとなる。

「理解する」ということは何となく分かったというのではなく、その内容が他者に説明できる段階まで分かったということであろう。そのためには、英文で読んで理解できた内容をまた英語で説明することがひとつの理想の型となる。しかし、そこまで至らずとも母

国語で過不足なく説明することができれば、理解という点に関しては十分であろう。さらに、テキストの内容を幼稚なものや単なる情報を伝えるようなものではなく、さまざまな学問の基礎となるような内容、あるいは個別（具体）と全体（普遍）を行き来しながら考えることのできるような内容を吟味して選ぶことで、英語の勉強をしながら、同時にものの見方や考え方を学ぶことができる。

外国人と会話を交わすためのオーラル英語の訓練も結構ではあるが、その内容はいきおい挨拶や道案内などの、ものを考える必要のない内容に陥ってしまうことがほとんどである。確かに、文法訳読方式では、何かを英語で聞かれてすぐに答えるというような反射能力を養うことは期待できない。しかし、これを全面的に廃止してしまうことは、英語教育から大切なものを奪ってしまう結果になる。それは、まさに英語教育を通して知力を鍛えるという点である。これは、即教養人となるための条件ではないが、先に示したような教養を鍛える中でもっとも重要な要件であるはずであろうと考える。言葉遣いを糺し、知力を鍛えることこそ、人間らしさを陶冶する鍵となるからと信ずる所以である。

文 献

- 阿部謹也（1997）：「教養」とは何か。講談社，東京。
- Brencick JM and Webster GA (2000) : *Philosophy of Nursing. A New Vision for Health Care*. State University of New York Press, Albany, NY.
- 川澄哲夫（編）（1978）：英語教育論争史。大修館書店，東京。
- 村上陽一郎（2004）：やりなおし教養講座。NTT出版，東京。
- 渡部昇一（1975）：「英語教育考＜亡国の「英語教育改革試案」＞」。腐敗の時代。文藝春秋，東京。109-143。

【Summary】

Title: English Education in a College-Level Liberal Arts Curriculum

Hiroyuki ETO

Nagano College of Nursing

In response to considerable criticism against English education in Japan, the contents of English classes have shifted into oral exercises from grammar-translation method. We have to accept this change as long as it is a social need and demand, while at the same time we should re-evaluate the significance of the grammar-translation method as an effective way to train one's intellectual faculties. Particularly at the college-level English education, the author insists on the importance of this method prior to the oral exercise because it may enable students to cultivate the spirit 1) to respect language (i.e., to understand others and to make oneself understood by language), 2) to train intellectual power (i.e., to criticize the standard value and to acquire sense of judgment), 3) to learn the fundamental knowledge and viewpoints, and 4) convey yourself between particularity and universality, in short, the spirit of self-learning. The present essay tries to consider the meaning and usefulness of grammar-translation method for the English education in Japan and to present its model with a concrete example.

Key words: English education, grammar-translation method, liberal arts education, general education

江藤裕之 (えとう ひろゆき)
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学
0265-81-5138 (Fax 兼)
Hiroyuki ETO
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan
e-mail: heto@nagano-nurs.ac.jp